

後期西田哲学における「絶対無」——「無の媒介者」による対立の克服の論として

``Absolute nothingness" in late Nishida's philosophy - as a theory of overcoming conflict through the ``mediator of nothing"

岩井洋子 (Yoko Iwai)

本報告では、後期西田哲学における絶対無を対象として考察をおこなう。論点としては、絶対に対立するものが、「媒介者 M」(=絶対無)を通して、矛盾的に結び合うという一、西田の提示した、絶対無を介した「個」と「社会」のありかたをさぐることにある。

西田の「絶対無」には元来二つの特徴があった。一つは、概念化されない、無実体的なものであるにもかかわらず、我々に内在するとともに、我々を「包む」ものであるということである。もう一つは、「弁証法的進行」が「絶対無によつて媒介せられる」(6・98)とあるように、「絶対無」は弁証法的な過程を「媒介する」ものであるということである。

このように、世界全体を「包む」ものであるとともに、弁証法的過程を「媒介する」ものとしてとらえられていた「絶対無」について、『哲学の根本問題』以降においては「媒介者 M」という概念を用いることで、「絶対に相反するものの統一といふ如きものでなければならぬ」(7・37)として媒介の働きを中心とみるようになる。

そして、この「媒介者 M」における媒介の特徴は、「各自が独立であると共に一である」(7・306)という形で統一をおこなうことであり、そこでは絶対無は「何処までも互に相独立すると考へられる個物と個物との媒介者 M」(7・309)となる。

本報告の目的は、絶対無 (=媒介者 M) を介して弁証法的に結合するとはどういうことなのか、その構造はどのようなものかを分析することにある。「各自が独立であると共に一である」つまり、対立するものが、「媒介者 M」(=絶対無)を通して、矛盾的に結び合う一、そこでは個物の総和ではなく、部分でもない結合が形成される。それに対して、絶対無がどう関わり、どういう個と社会の関係性を導き出すのか。これはイデオロギー対立、宗教対立など、共認不可能な現代社会に対して一つの処方箋を提示しうるのかということを報告の論点とする。